

創刊1周年記念スペシャルインタビュー

に陥らず
療の
姿を
せよ。

『ターンアップ』編集長
武田 宏

ンタビューを敢行した。元日本学術会議会長で国下、国会事故調)の委員長の立場から「原発事故の揺らぎない姿勢で調査と報告をやり遂げた黒川者でもある。危機に瀕する日本の医療界を立て直について、編集長の武田宏が迫った。

取材／武田 宏
文／及川 佐知枝
撮影／片岡 正一郎

マインドセット

思い込み 未来の医 あるべき イメージ

政策研究大学院大学アカデミックフェロー／
特定非営利活動法人日本医療政策機構代表理事

黒川 清

創刊1周年を記念し、黒川清氏へのスペシャルイ
会東京電力福島原子力発電所事故調査委員会（以
は人災だった」との結論を報告。科学者ならでは
氏は、日米両国で長く内科医として活躍した医療
すべく、薬剤師を筆頭に医療者はどうあるべきか



パラダイムシフトに敏感になり 医療の未来を常にイメージ

黒川清氏の第一声は、こうだ。

「日本の医療者はもつと、世界の大きなパラダイムシフトに敏感であるべきでしょう。正直、たった今起きている変化への反応は、少し鈍く感じます。ここどころ日本の医療政策と医療制度をめぐる環境はドライバースティックに動いており、確かに皆、十分に注視しているようですが、いかんせん視野が狭く、思考の時間軸が短い。政策や制度が変わるのは、国民のニーズが変わっているからだという点に思いを馳せてほしいのです」

期待に違わず、大きな気づきを喚起させてくれる提言だ。武田の顔は、早くも紅潮ぎみである。ただ、黒川氏にインタビューする楽しみは、実はその先にあった。間髪を入れず、なぜ医療者がパラダイムの動きに鈍感なのかの分析が入った。

「パラダイムシフトに敏感であり、国民のニーズに準じろとは、つまりサプライサイド、提供する側からのものの見方を捨てろということ。産業革命以来百数十年にわたり、世界全体で慣れ親しんできた大量生産、大量消費によって立つ価値観ですから、誰しも容易に捨て難いのは道理です。ですが、この時代の変化があと戻りするはずもなく、関係者は変化の本質をつかみとり、先を読むことが大事です。掌を返すもの言いになりますが、産業革命以来の価値観なんて、しょせんたつた百数十年のつき合いなのですよ。かたくなに守つたり、ましてや不可侵と考えたりするようなことではない。たとえば、医薬品の業界でアスピリンが商品化され産業となつたのは、100年ちょっと前。日本の皆保険制度にいたつては、まだ約50年。冷静に数字を読めばすぐわかるはずです、明日からまたく違うやり方に変えたからといって、未練がましく振り返るような

ものではないと。1000年つづいた伝統なら話は別ですが——なんとはなしに、今のかたちがそのままあるのを前提にものを考えてしまう。思い込み（マインドセット）でしか、ありません」

武田からの次なる質問は、国際的視野を持つ黒川氏には、日本の薬剤師がどう見えるのかである。

「私はアメリカで医師をしていました時期もありますから、彼の国の薬剤師の活躍ぶりはよく知っています。日本の薬剤師は海外の薬剤師の活躍に追いつこう、追い越そうとがんばっているのも知っています。ですから、エールとして贈りたいのが、冒頭のお話です。もつと勉強し、もっと臨床に強くなるのに加え、もっと視野を広くし、従来のマインドセットに陥らぬよう、医療の未来の、あるべき姿を常にイメージすることが必要だと思います」

すべてをオーブンにして 調査結果を世界に向けて発信

世事に疎い読者でなければ、黒川氏の顔は見知っているだろう。

「原発事故は人災だった」と断じた、国会事故調の委員長を務めた人物なのだから。報告書提出の記者会見は全国ネットのテレビで繰り返し報じられ、国会事故調をめぐっても、黒川氏をめぐっても、ネットにはテキストと画像、映像があふれかえっている。話は、自然と国会事故調のほうに向いた。

2011年5月、政府が事故調査・検証委員会の立ち上げを決めた。「事故の当事者が調査するだと?」、「都合の悪いことも含めてすべてをつまびらかにすると、期待する者がいると思うのか!」との落胆、怨嗟が渦になつた。渦に一石を投じるよう11月に発表された国会事故調の構想、法案審議、成立。快哉の声にあと押しされながら、12月、「黒川清、委員長就任」の報。事情通たちは誰ともなく、こう呟いた。「この人事なら大丈夫、国会は本気だ」と。

「すべてをオープンにして調査し、調査結果を世界に向けて発信する必要がある。昨年の3・11以降、早い時期から、独立した国際的調査委員会を国会が設置すべきとアジテートしていたのは、誰もう私でしたから（笑）、引き受けざるをえませんでした。何から何までが初めてのことばかり、どこをどう見ても困難な仕事になるのは明らかで、心の奥の奥では『ああ、たいへんなことになった』と絶句していましたよ。

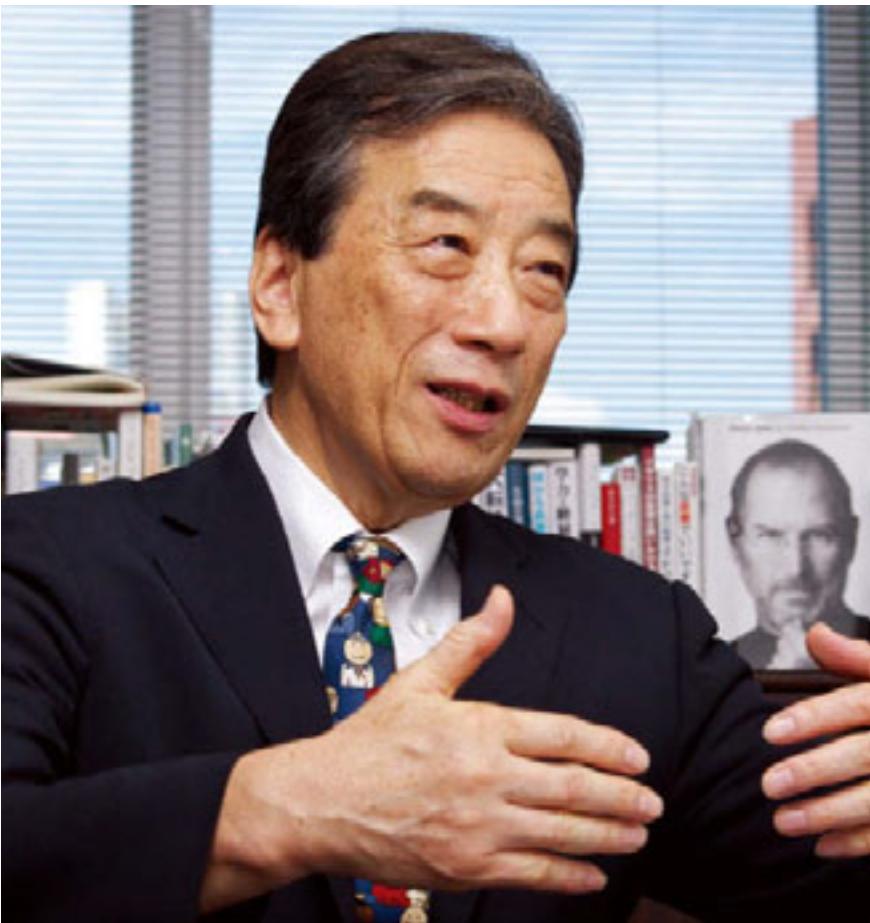
ただ、国会が国政調査権行使し、独立調査委員会を発動することは現行憲法下では初。快挙です。メンバーとして立ち会えることに誇らしい気持ちが湧き上りました」

2012年7月5日に発表された、総600ページ以上に及ぶ報告書 (<http://www.naic.jp>) の内容には、誌幅の都合上触れない。たった6カ月でこれだけの内容をまとめた委員会、委員の仕事への評価は、後の歴史が必ずするだろう。

繰り返される話から想起される 「科学者の憂国」

黒川氏に対する誤解が生まれてしまったかもしれないのに、楔を刺そう。

黒川氏は、反体制派のアウトローではない。東京大学（以下、東大）医学部卒で、15年弱を米国で活動、UCLAで内科教授職を務め、帰国後は、東大教授に。東海大学医学部長を経た後、科学者をたばねる内閣府の特別機関、日本学術会議の会長に抜擢された。その職を辞すれば即座に内閣特別顧問に招かれた。権力機構が、「有



PROFILE

（くろかわ・きよし）

1962年 東京大学医学部卒業、東京大学医学部附属病院インターン

1963年 東京大学医学部第一内科／医学研究科大学院（医学博士）

1969～84年 在米。ペンシルベニア大学医学部、UCLA (University of California, Los Angeles)、USC (University of Southern California)、UCLA医学部内科教授 (Professor of Medicine)

1989年 東京大学医学部第一内科教授

1996年 東海大学教授・医学部長・総合医学研究所長

1997年 東京大学名誉教授

2003年 日本学術会議会長、内閣府総合科学技術会議議員

2004年 東海大学総合科学技術研究所教授、東京大学先端科学技術研究センター教授（客員）

2005年 日本医療政策機構代表理事

2006年 内閣特別顧問、

政策研究大学院大学教授

2011年 政策研究大学院大学アカデミックフェロー

国会東京電力福島原子力発電所事故調査委員会委員長

日・米（カリフォルニア州）医師免許。日・米内科専門医、腎臓内科専門医。米国医学アカデミー (Institute of Medicine of the National Academies) 会員。日本内科学会理事長、日本腎臓学会理事長、国際腎臓学会理事長などを歴任。

* 黒川清公式ウェブサイト: <http://www.kiyoshikurokawa.com>

創刊1周年記念スペシャルインタビュー

識者」として全幅の信頼を置く重鎮なのである。もちろん、威光もある。褒章（紫綬褒章）や勲章（旭日重光章）も手にしている。

ただ、アウトローではないが、社会通念に照らせば明らかにラジカルだ。すべきことが目の前にあれば躊躇なくやる。東大教授から東海大学医学部長になった際は、あまりに前例のない転出、逆風を吹かせる暇を与えない移籍に、多くの関係者が度肝を抜かれた。

そんな黒川氏だから、原発が爆発したのなら原因を調査し、公開しなければならないと考える。調査の結論が「人災である」となったからといって、はかかる先をうかがうような仕事はしない。武田も、個人的にその点に大いに共感している。

「原発事故は福島県だけの問題ではないのは当然ですが、日本だけの問題でもない点に留意してほしい。全世界が、人類共通の重大な事

故体験として真相を知りたがっているのです。そのような世界の情勢に無頓着に、適当にご都合主義な自己分析など示したら、日本は世界から相手にされなくなるでしょう」

国際経験豊かな、視野の広い人物であるとうかがわせるコメントだ。ただ、論旨は決して複雑ではなく、むしろ簡潔。長く観察する者にとっては、良い意味で変化、ブレがない。発言も行動も常に、一貫しているのだ。そのぶん「なぜ、わからない。なぜ、忘れる」という苛立ちさえ垣間見える。

彼の繰り返される話からは、こんな言葉が想起される、「科学者の憂国」。

「〇〇博士」の力を頼った。その影響で、大志を抱く多くの子どもたちが科学者を夢見たのだ。工学博士か、医学博士か……といった具体的な枠組みは知るすべもなく、無邪気に「科学者」をイメージした。

経済成長とともに齢を重ね、オールマイティな科学者像にリアリティの欠如を感じるようになる。気づけば、総理大臣より偉い科学者は存在しなかつた。空想は空想でしかなかつたのだと、あきらめた若者は数多くいただろう。

国会事故調の参考人招致で委員長席に陣取り、質疑応答を切り盛りする黒川氏の姿は、そんなかつての子どもたちの心の中で落ちた偶像が復権した瞬間でもあつた。医師であり科学者である賢者が、国難脱却のプロセスを委ねられているのだ。

議会から全権を委ねられ、世界のため、日本のために真相究明の指揮を執るのは政治家でも役人でもない、偉大なる科学者なのだ。置き去りにされた空想のがれきの中に埋もれていた憧れが掘り出され、現実の世界で科学者の偉大さを実感できた。憧れが夢で終わらない時代の到来を予感させられた。

「今回は事故調査委員会というミッショントを持つて国会初の独立委員会を試みましたが、この手法はもつと活用したほうがいい。米国では科学的分析を軸に政策を提言していく独立委員会が年に100本以上も立ち上ります。すぐに採用されるとは限りませんが、提言はすべてストックされ、時の政府や議会がその中からとり上げ、実行していくのです」

医師であり科学者である賢者が 国難脱却のプロセスを委ねられた

薬剤師は、医療教育を受けた 科学者の一員である

昭和の子ども向け空想科学マンガやアニメでは、科学の力で正義を守り、滅亡の危機から人類を救う科学者が大活躍した。日本政府や地球共和国のリーダーたちは、ことあるごとに大科学者である

「薬剤師には黒川先生同様に、科学者である事実を忘れないでほしい。薬剤師には自分たちと同じく出自を医療界に持つ科学者が、



国民のヒーローになつたことに大いに刺激を受けてほしい』——誰があろう、もつとも刺激を受けている武田の心からの感想である。

黒川氏が今後の医療の展望を示してくれた。

「メディカルドクターが医療において唯一絶対の存在であつた時代は、終わります。ただ、順々ぐりで薬剤師の時代がくるなんていうのは低次元な考察ですよ。極論すれば、これからの医療は『できる医療者なら誰がやってもいい医療』になつていくでしょう」

「もう少し詳しく、お話ししてください」と武田が促す。

「高齢化が進み低成長経済がつづく日本には、医療にまわす公的資金が、ますますなくなります。つまり、国民総出でお金のかからぬ医療を考え、紡ぎ出していくしかありません。

見えてる方向性は、高齢者を地域で受け入れ、疾患とつき合う医療です。そんなとき医療者に求められるのは、どんな免許を持ちどんな専門技術を備えるかより、『そばで寄り添えるか、否か』になる。薬剤師や看護師、多種のメディカルスタッフが、患者に寄り添う役割を担えば、医師の負担は大いに減り、日本の医療環境は大きく変わるはずです」

地域で疾患を診る考えは、決して目新しくはない。ただ、黒川氏のそれは膨大なフィールドワークを背景にした実感からきてる。「インターネットを上手に操り暮らす市民は、医療情報の入手を含めた広い意味での医療へのアクセスを、これまでとはまったく違うスタイルで行い始めています。医薬に関する知識も、驚くほど持つてている。

しかも、広範に多くの人とコミュニケーションをとりながら、必要な情報をより分ける力も持ちあわせていて、『この薬にこんなな薬効がある』より、『こういう方法で、こういう薬で、こんなふうに健康になつた』を重視し、とり入れます。賢明ですね』

ブログもツイッターもやすやすと使いこなし、ネット住民とも非政府団体、非営利団体とも柔軟につながつて。黒川氏の未来予測は、体感値のゲージを眺めながらのものだ。強い説得力がある。「もう人々は、『これしかない』という情報を欲していません。いろいろなことをやつた中で、確信をつかんでいく方法論を知り始めま

した。だから、社会でも医療でも、ボトムアップから生まれる活動がどんどん増えるでしょう。

これまで薬剤師は、医師の指示に従つた作業にのみ専念していました。しかし、医師の次に医療知識を持つ薬剤師こそ、ボトムアップから生まれる活動の核になつてほしいと考えます。薬剤師の意識改革を早急に進めなければ、ほかの医療者に後れをとつてしまいますね」

武田は薬剤師の意識改革の必要性をさらに強く認識しつつ、黒川氏の発言にうなずいた。

医療界を解放するのは 医療者全員の責務

黒川氏の発する言葉は、科学者から科学者へのエールであり出題だろう。「できる医療者なら誰がやってもいい医療」の時代にこそ、コアの部分で専門家の支えが必要。パラダイムシフトの先にある、医療の未来において、科学教育を受けた医療者の役割はますます大きくなるはず。もちろん、薬剤師は担い手の筆頭になるべきだ。

「目の前の課題を見つめ解決する集中力はなくてはなりませんが、同時に、複眼的に大局的な視野も維持していただきたい。今、医療は実のところ根本から大手術し、大変革されるべき時期にきているのです。ものごとを一举に変えるのはたやすくはないからといつてあきらめては終わりです。

クラウドを用いて患者が自分のカルテを管理する医療。慢性疾患の医薬は、3回程度のリフィルがあつてしかるべき。OTCもネットの活用もある。誰がどう考えても実現していく当たり前のこと�이まだ実現していない。

解けていないマインドセットから、医療界を解放するのは医療者全員の責務と自覚してほしいと願います」